

オール電化・雨月物語

青柳碧人

シラミネ

ああ、いらつしやい真由^{まゆ}。来てくれてありがとう。入って入って。何、やだそんな顔して。

大丈夫、元気なんだから。がんって言っても早期発見だし、そう簡単に死なないわよ。

ワインか何か、飲む？ 私は飲めないけど。

……本当に大丈夫なんだから、そんな泣きそうな顔しないで。手術が成功する可能性は高いし、若いから回復も早いでしょうって医者に言われてるんだから。

ワイン飲まないなら、紅茶にしようか。ペットボトルで悪いけど。適当に座って。

……はい紅茶。私ももうね。

さて先に、仕事の話しよつか。引き継ぎ、もう大丈夫だと思うけ

ど、これが言っていたファイルね。帳簿ちようぼのほうはみんな、こないだ
教えたファイルに入ってるから。

くれぐれも、誰かに盗まれるようなことがあっちゃだめよ。表向
き協力してくれているように見せて、反対しているやつはいっぱい
いるんだから。本当に頭の固い人が多くて困っちゃう。社会をより
よくするのは、世に影響力のある企業の使命だっていうのにな。

それで、なんだけど……。そう、ここからが本題ね。真由に、これ
を預かってほしいんだ。

はい。これ、なんだと思う？

うん。額に見えるよね。でもこれ遺影いせいなの。デジタル遺影。もう私
の画像をインストールしてあるわ。万が一の時のために預かっとい
て。

……だから、死なないって。万が一っていうのは「一万のうちの一
回」って意味でしょ。パーセンテージにしたら0.01パーセント
よ。

それから……。実はそのデジタル遺影と一緒に真由に預かってほし
い話があるの。

うん。預かってほしいっていうかまあ、聞いてほしい話って言っ
たほうがいいかな。うん。今まで誰にも話したことのない話だから。

*

私がシラミネの経営に携わるようになったのは、大学三年生の春のことだったわ。母からいきなり電話がかかってきて、重役が一人病気で辞めることになったから、代わりにあんたが入りなさい、卒業までは学生をしながらいいから——ってね。

もともとシラミネへの入社を条件に学費も出してもらってたから、私に選択肢はなかった。勤務時間とかだいたい融通ゆうずうしてくれたとはいえ、大学生との二足のわらじは本当にきつくてね。それでもなんとか、夏休みは何日かもらえることになった。それを、だいぶ行けてなかったサークルの夏合宿の日程に合わせたの。

そう。岡山みまつの、三松先輩の実家のお寺。いくら騒いでも文句を言われないからって夜通し飲んだけど、夜中、土砂降りになって気温が下がって、みんな薄着だから寒くなっちゃって大変だったよね。

合宿の直前に、森代伯母もりよさんに「友だちに美容に興味のある子がいたら就職をあっせんしてあげていいわ」って言われてたから、思い切って私、真由に声をかけたんだよね。

いやいや、お礼を言うのは私のほうよ。

いきなり会社員になって不安だったし、友だちで美容とか化粧品

とかいちばん詳しくかったのは真由だったもの。「就活しなくてラッキー」なんて明るく受け入れてくれて、どれだけ心強かったか。

大学を卒業して本格的に社会人になってから、真由の実力を思い知らされたよ。真由っておっとりしているようにみえて意外と交渉上手で、取引先との商談もバンバン決めてくるし。今やってる私のプロジェクトだって真由の助けなしにはここまで来られなかったし、本当に感謝してる。

ああ、ごめん。脱線しちゃった。

私が話したいのは、その合宿が終わったあとの話。

そう。よく覚えてるね。合宿が終わった後、東京に戻ったりそれぞれの実家に戻ったりするみんなと別れて、「もう少し一人で旅をする」って私だけ残ったでしょ。まだ夏休みは三日くらい残っていたの。後で真由には、広島をぶらぶらしていたなんて言ったんだけど……あれ、嘘なんだよね。

本当は、瀬戸内海を渡って、香川に行ったの。祖母のお墓参りにね。

うん。シラミネの創業者、白峯キヨミよ。祖母の旧姓は露原って言うてね、香川にルーツがあって、祖母も十三歳まで香川で生活していたんだって。

真由はうちの祖母のこと、どれくらい知ってたっけ？

そうか。そうだよ。私が真由と出会う前に他界していたもんね。
じゃあちよつと長くなるけど、先に祖母の話をするね。

彼女はもともと、美容になんてまるで興味がなかったそうよ。大
学で生物学を学んでいるうち再生医療に興味を持って、医学部に転
向した。学生時代はアフリカの……どこだっけな、とにかく戦場だ
った国に赴いて、地雷で手足を失った人の治療にあたったそうよ。
祖母がK i v細胞を発見したのは、大学の博士課程のとき。まあ
私も専門外だからよくわからないけど、もともと別の人が培養して
いたイヌの細胞に、自分の実験で使うはずだったたんぱく質を、間
違って配合してしまったのね。それを顕微鏡で覗いたら、細胞の一
部が若返っているのに気づいた。

祖母は初めこの発見を、再生医療に使うと考えたけれど、教授
に相談したら突っぱねられて、研究そのものをやめろと言われたの。
そのとき偶然出会った大学のOB、白峯隆三に「うちの会社にくれ
ばその研究続けられるかもよ」って言われたのよ。

隆三が勤めていたのは、ゼンティ・コスメティク。今はうちより
だいぶ小さくなっちゃったけど、当時は国内最大手の化粧品会社で、
ちやうどエステ事業にも力を入れようってときだった。最新の実験
器具と潤沢な費用のある実験室で祖母は研究に研究を重ね、K i v
細胞の実用化に向けて邁進した。そのときに祖父と知り合って結婚。

三人の子どもを産んだ。

森代伯母さん、泉伯母さん、そして私の育ての父、谷朗^{たにろう}。

K i V細胞が実用化の日の目を見ることになったのは、谷朗が小学校にあがる年だったって聞いているわ。顔全体の細胞をまるまる若返らせる、字義通りのアンチエイジング。……五十年経った今じゃ当たり前だけど、当時はすごく衝撃的だった。二年のうちにゼンティは化粧品業界史上類を見ない急成長を遂げたわ。

このタイミングで、祖母は祖父の隆三とともにゼンティを退社して独立し、シラミネを創業した。ゼンティと袂^{たもと}を分かった理由はあんまり知らないけど、たぶん自分の力を試したかったのよね。

シラミネは初め、前途多難と思われたそうよ。業界最大のゼンティに睨^{にら}まれているわけだから当然っちゃ当然よね。でも祖母はすぐに極秘で研究を進めていた秘策を世に送り出すことにした。

キルファッティ法——。肥満細胞を殺し、さらには遺伝子レベルで肥満の要因となる情報を除去するなんていう常識破りなダイエツトは、厚労省に承認されるまでの三年間は苦しい生活を強いられたみたいだけど、承認されてからは真由も知る通り。

一躍世間に知られるようになったシラミネはその後、貼って寝るだけで毛根細胞が復活するB Bシートとか、かけるだけで目じりのしわが取れていくサングラスとか、独自の技術を次々と発表して

成長していった。科学者として優れていた祖母と、経営者として優れていた祖父がタッグを組んだんだから当然といえば当然だったかもしれない。

祖父と祖母は湘南にお城みたいな豪邸（おとぎやしろ）を建ててね、私も小学生の頃は夏休みによく遊びに行つて、プールで遊んだっけ。

まあ、私の話はまたあとで……。

とにかくシラミネを世界でも知られる大企業に成長させた祖母と祖父さんだけど、唯一至らなかつた点があるとすればそれは、子育てよね。贅沢（ぜいたく）な暮らしができるようになった三人の子どもは、三者三様の放蕩人間（ほうとうぢやう）になった。

長女の森代伯母さんは知つての通りの美術品マニア。高校生のころからアンティーク（こ）に凝つて、一人で海外に行つてはチェストだの鏡台だのを買ってきて葉山（はやま）の家のあちこちに置いてね。それだけならまだいいけど、ピアノとかバイオリンとか、楽器なんて何一つできないのに高いものを買いまくつてさ。シラミネに入社したあとにはさらに調子に乗つて絵とか彫刻とか……ほら、もう売っちゃつたけど原宿支店の応接室にあつた海の風景画。そうそう、六千万円だつてのよ。

次女の泉伯母さんと言えば学生時代からの年季の入つたスポーツ狂い。特にバスケットボールが大好きで、入社後すぐにバスケット

ボールチームを作ろうって言い出したの。お金をばらまいて選手を引き抜いてコーチを雇って。それで散々な結果なのに、ずっと手を引こうとしなかった。そればかりかオリンピック選手を出すんだなんて言って、カヌーだのマラソンだのに手を出して。肝心の仕事のほうは何一つわかっていなかったらしいのよ。

そして、末っ子の谷朗。あの人はとにかくもう、もう女遊びよね。

高校生の頃に付き合っていた彼女を妊娠させて祖父が墮胎費用を出したってという話もあるし、大学生のころもさんざん遊んで、シラミネに入って自由に使えるお金が増えてからはさらに豪放な遊びを繰り返したっていうわ。夜の街を次から次へと飲み歩いて、二十六歳のときに入ったキャバクラで働いていた女性を見染めたの。相手は谷朗より三歳年下だったけどそのときもう五歳の娘がいるシングルマザーだった。すっかり彼女にほれ込んだ谷朗は、子どもの面倒も見るといって、彼女と結婚したのよ。

まあ、その彼女っていうのが私の母、節子。せつこ結婚後、私たち母子が移り住んだのが、今いるこのマンションってわけ。

それまでおんぼろのアパート暮らしだったのが、こんないいところに住めて自分の部屋ももらえて、毎日三食美味しいご飯が食べられるし、地獄から天国に引き上げられたような気分だったわ。まあ、谷朗は家をあげがちで、たまに家においても私のことなんて無視して

たから、父親だとは思ってない。

対照的に優しかったのが祖母のキヨミよ。私が小学生のときは週に二、三回はここで一緒にご飯を食べたわ。あのころはもう六十代も後半だったのかな。それでも勉強はわかりやすく教えてくれたし、いろんなものを買ってもらったわ。もちろん研究は進めていたらしいし、現役の経営者でもあったわけだけど。

あとで知ったことなだけどね、実は私に会いに来ていたというより母に会いに来ていたのよね。女手一つで私を育てた母に同情っていうか、興味があったみたい。私が寝た後、ずーっと二人で話していたそうよ。

初めのうちは、自分の子どもたちのことを、私の母に語って聞かせていたそうよ。子育てをおろそかにしたせいで揃そろいも揃って浪費家になってしまった。仕事がまったくできないわけじゃないけど、それよりも出ていくお金が多すぎる。隆二が甘くてそれを全部容認してしまうのが不満だ……ってね。

そのうち祖母は母に「見込み」を感じたみたい。自分も経営は素人しょうとだけど、って言いながら、ビジネスの勉強をしてみないかって誘ってきたんだって。そういえば母がなんかそのころから「経営学」みたいなタイトルの難しい本を読みはじめていたなあって思うんだよね。

とにかくそんな生活が続いたんだけど、私が小学校五年生の年の

十一月、大きな転機があったのね。

祖父の隆三が死んだの。

寒い、日曜日だったわ。部屋で漫画を読んでたら突然母が入ってきて、「おじいちゃんが倒れたから行くよ！」って。タクシーに乗ってね。病院に行ったら、祖父はもうベッドに仰向けになって動かなくなっていた。祖母が真っ赤な目をして、「おじいちゃんにはもう会えないのよ」って。

原因は脳卒中。本当に倒れる直前まで広告代理店の人と普通に仕事の話をしていたんですって。本当にああいうのって、突然なんだよね。

祖父は弁護士に遺言状を預けていて、それにしたがって祖母が新しい代表取締役になった。

祖母の大改革が始まったのはここからよ。

三人の子どもへの対応については祖父とは真逆の方針だったからね、すぐにテコ入れが入った。森代伯母さんが陣頭指揮じんとうを執っていた美術クリエイト部門は解散。泉伯母さんが夢中になっていたスポーツ部門も、バスケットボールチームは他の企業に売却する手筈を勝手に進めて、他はやつぱり解散。

谷朗の女遊びだけは個人のことだから規制のしようがなかったんだけど、過去のいくつかの浮気を理由に役員報酬は大幅カットされ

ちゃった。それから祖母は、谷朗とズブズブの関係にあった経理の社員を軒並み地方に左遷して、おかしな領収書を全部経費で落とさせないようにした。谷朗が夜の街に行くようになったし、愛人も整理せざるをえなくなったのは事実だったろうね。

実の子どもだからこそ、社員の模範となることを肝に銘じさせなければ……親としての愛の鞭だったわけだけど、その思いは届かなかった。三人は結託して、祖母に牙をむいたのよ。話の通じる株主たちを動かして、祖母を代表取締役から追い落とし、森代伯母さんを後継にしたの。

しかたなく退いた祖母だけど、彼女にも味方の社員や株主がいなわけじゃないわ。なんとか返り咲こうと根回しをしていた。けど、その最中に車の事故に遭って、足が不自由になってしまった。

三人の子どもは表向き、祖母を心配するそぶりをしたわ。「お母さん、昔から高原に住みたいって言ってたじゃない」「そうだそうだが、これを機に空気のいいところに移住して、仕事のこととは忘れるべきだ」そんなことを口々に言うと、これ見よがしに自分たちのお金を出し合って志賀高原に一軒家を買ってね、祖母を無理やりそこに移してしまった。ここまで、祖父が死んでからわずか一年のことよ。

三人が強引だったのはそれだけじゃないわ。車いす生活の祖母が一人暮らしじゃ大変だろうって、世話役として、私の母、節子を一緒

に志賀高原の家に移住するように強制したのよ。森代伯母さんは気づいていたのよね。祖母が後継者として母をひそかに育てていたことを。谷朗はそのころもう別の愛人がいて、母からはすっかり熱が冷めていた。男って信用のおけない生き物よね。

こうなると、私も志賀高原に行けっという流れだと思うじゃない？　ところがそうじゃなかったの。というのも、私って、何げに成績がよかったから。森代伯母さんに「この子は手なずけたら使えそうだ」って思われたみたいで、東京で……つまり、この部屋でその後も暮らすことを強いられた。実の母には年に二回しか会えなくなつたのよね。

ひどいでしょう？　ひどいのよ。

でもその実、私は対してつらくもなかった。小六って言えばもう独立心があったし、ちょっと母親が疎ましくなる時期でもあったのね。志賀高原なんて田舎に暮らすのもまっぴらだったし、谷朗は自分分は滅多にここに帰ってこない代わりにお手伝いさんを雇ってくれたから。このお手伝いさんが話の分かるいいおばさんでね。身の回りのこと全部やってくれるし、私、小六にしてこんなに広い部屋で一人暮らしを満喫してたわ。

祖母が亡くなったのは、私が中二のとき。これまた急なことで、死に目には会えなかった。お葬式は志賀高原の斎場さいじょうで二人の伯母が取

り仕切ったんだけど、いざ火葬が終わってお骨を埋葬するってときになって、「香川に葬ほうむることにするわ」って森代伯母さんが。

祖母が香川出身だって私が知ったのはそのときよ。森代伯母さんによれば祖母は、「死んだら生まれ故郷に葬ってほしい」って言ったそうんだけど……本当かどうかかわからないわね。だいたい、香川の露原の家はみんなその時点で死んじゃってたんだから。でも森代伯母さんはいつの間にか、入るお墓まで準備していたのよ。

それが、当時流行りはじめていたピースドーム。

……見たことない？ ドームって言っても建売住宅みたいな白い壁の四角い建物で、そこに三十人から百人くらいのお骨がおさめられていて、お参りに行くとき適宜そのお骨だけ出してくれるっていう共同墓地よね。

あれだけ女性の美容に尽くしてシラミネを大きくした白峯キヨミがピースドームに葬られるなんて……って、母は嘆いていたけれど、森代伯母さんはきついところがあるから、ねえ。押し切られちゃって。

そうね。三人の親不孝な子どもたちは、祖母のことをだいぶ疎うとんでいたんだと思うんだけど、それだけじゃなくて、祖母の存在をできるだけ東京から遠ざけたかったんだと思うわ。祖母の息のかかった社員たちへの牽制けんせいってことよ。これから先は私たち三人に文句は

言わせないわっていう意思表示と言ってもいいわね。

とにかくこれで祖母が香川の山奥のピースドームに葬られるまでのいきさつはおしまい。三人はいいよ会社を私物化するよう好き勝手やりはじめた。泉伯母さんなんてバスケットはあきらめたんだけど、アイスホッケーチームを作っちゃってね。

で、いよいよ私の、夏合宿のあとの話になるんだけど……しゃべりすぎて疲れちゃった。

ちよつと休憩。

……あ、いや、やっぱり紅茶はいいわ。私にはこれがあるから。

いいじゃない。明日から入院で、しばらくできなくなるんだから。

……まあ、隠れてやるつもりだから。

健康に悪いなんて嘘よ。だって私、これで五キロもダイエットできただから。

ふう……

見てなさいよ。復帰したらこれで盛り返してやるから。

*

よし。じゃあ続きね。

三松くんのお寺の合宿を終えてみんなと別れた後、私はすぐに電

車に乗って香川に向かったわ。最寄りのさびれた駅から一日に三本しかないバスに乗って、山の中腹の『霊園前』っていうバス停で降りて、そこからお墓のなかをずんずん登っていくのよ。

お盆にはちよつと早い時期だったから、人は全然いなかった。ピースドームは墓地の奥、山頂付近の、森の中に四つあってね。その中でもいちばん奥の、蔦つたのからみついたドームだった。

入り口わきの電光掲示板に「VACANT」って。そのとき知ったんだけど、お参りは一組ずつしか入れないようになっているのよね。本当は予約していったほうがいいと思うんだけど、シーズンオフだったから、ドアの前に立ったら何の抵抗もなく開いたわ。

ホールっていうのかな、壁の白い、ひんやりした空間でね。照明も落ち着いていて、長机が一つと、白い革張りの椅子が五脚かそれくらいしかなかった。

……ううん。全然広くない。卓球もできないくらい。

で、正面の壁に仏壇というか、祭壇みたいなのがあって、お線香立てと、画面の真っ暗なデジタル遺影があった。

右手の壁にモニターがあって、「お客様の情報を入力してください」って。マイナンバーカードをタッチ。パネルにかざせばいいみたいだったからそうしたら、「候補」っていうウインドウが開いて、「白峯キヨミ」の名前が出てきた。タッチしたら、静謐せいひつな音楽が流れてきて

ね、祭壇の向こうで何かがちやんがちやん音がするのよ。しばらくしたら祭壇の小さな扉が開いて、骨壺の載せられたトレイがすっと出てきたわ。奥で管理されていて、呼び出されたときだけ出てくるっていう仕組みになってるのよ。

すごいなあって感心している私の前で、今度はデジタル遺影にぼんやり影が浮かんできて、生前の祖母の遺影になったわ。お気に入りでだったお着物を着てね、目じりは垂れ下がって口元は微笑^{ほほえ}んでいてね。その目と口が、ふっ、と動くのよ。

そもそもデジタル遺影っていうのはそういうふうにできているっていうのは頭ではわかってるんだけど、その顔を見たら私、たまらず涙が出てきちゃってね。

子どもの頃、よくこの部屋に来ては私に勉強を覚えてくれた優しい顔を思い出しちゃって。でも、その懐かしさより、「かわいそう」っていう気持ちのほうが強かった。

だってそうでしょ？　そもそもホワイトピークを創業したのは祖母なのよ？　会社を大きくしたのは祖父の経営手腕だったかもしれないけど、K i V細胞もキルファッティ法もB Bシートも、全部祖母の研究の成果じゃない。その遺産は今も美にこだわる人々の心を支え、シラミネを美容業界のトップランナーにしている。それなのに、そのいちばんの功労者の祖母がすっかり忘れられて、こんな田

舎の山の中の共同墓地にひっそりと葬られているなんて……そう思ったら祖母がかわいそうでかわいそうで。思わず涙が出ちゃった。

私、目をつむって手を合わせて、「お祖母ちゃん」ってつぶやいたのね。

〈誰だい？〉

突然声が聞こえたから、びっくりしちゃって。だってそのホールには私以外誰もいないはずなんだから。それどころか、墓地に入ってから誰の姿も見えないのよ。

〈誰だい？〉

また聞こえた。それも、私の前からよ。

そこには、祭壇しかないわ。デジタル遺影の祖母の目が私をじっと見ていた。

〈誰だい？〉

三回目にしてようやく気付いた。その口が動いていたの。間違はなく、懐かしい祖母の声だった。

デジタル遺影って音声も出るんだ。私は当然、そう思ったわ。生前の音声データが残っていれば、声質はもちろん抑揚や言葉遣いまでコンピュータ処理して、あたかも故人がしゃべっているような音声を出すことはできるでしょ。きっとこちらの音声も認識できるんだろうと思ったから、

「なつみよ」

って口にしたの。そうしたら、

〈なつみ……節子の娘のなつみかい。大きくなったねえ……〉

画像は優しい笑顔になってね。祖母に再会できたみたいで嬉しくなると同時に、あれ？　って思った。私がお参りに来たときに備えてこの文言を用意するってことはできるかもしれない。でも「節子の娘の」なんてわざわざ言う必要ないじゃない。それに「大きくなったねえ」なんて。もし私が五十歳になって初めてお参りしたとしたら、「大きくなったねえ」は変じゃない。

私の顔の形をスキャンして年齢を割り出すシステムでも搭載されているのかななんて思ってたけど、顔の若さも骨格の形も変えられる美容法を確立した祖母がそんなことするなんて……って思ってたら、遺影はまたしゃべったわ。

〈今、何をしてるんだい？〉

って。こうなったら、音声がどこまで対応できるのか気になるでしょ？

「今は大学四年生。でも、来年からシラミネで働くことになってる」
私は正直にそう答えた。

その瞬間——遺影の背後が燃え上がるように真っ赤になった。

祖母の目が狐み^{きつね}みたいに吊り上がって、目じりから頬にかけてのし

わもすごくくてね、私、思わず悲鳴をあげてしまったと思うわ。

〈森代は？ 泉は？ 谷朗は？ 今、まだ会社に残ってるのかい！〉

怒りのこもった音声がホール中にびりりと響いた。いつのまにか、あの穏やかな音楽も止まっていたの。

〈答えなさい！ なつみ！〉

って。いくらなんでもおかしいじゃない。お墓参りにきた親族に、故人の怒りに満ちた顔を映し出して見せるなんて。私、怖くなっちゃって逃げようとしたの。

開かないのよ、自動ドア。指を引っかけてこじ開けようとしたけれどびくともしない。

〈開かないよ〉

デジタル遺影の祖母は私に言うわけね。

〈あんたが答えない限り、帰さないよ〉

私、そのときようやく思えたのよ。祖母が本当にそこにいる……
って。

……そんな目で私を見ないでよ、真由。

私だっけすぐに信じてもらえらると思っただけ。でも私が現実主義者なの、真由がいちばん知ってるでしょ？ 占いとかだっけ嫌いだし、幽霊とか、おんねん怨念とか、そういうのばかばかしいって私だっけと思うわ。

でも、本当のことなの。

正直に言うよね、私だって自分でこの体験が信じられないから今まで黙っていたのよ。でも、もう誰かに聞いておいてほしいなって。

……わかってくれた？ ……うん。とりあえずでもいいよ。じゃあ続きを話すね。

ええと、「あんたが答えないかぎり、帰さないよ」ってどこまで話したわよね？

私は思いつく限りに全部話した。森代伯母さん、泉伯母さん、谷朗の三人が会社を引き継いで、好き勝手に事業をやっているってこと。私の母はその三人からもう会社には近づかないように言われているっていうこと。話しているうちにさらに祖母の顔は怖くなっていたわ。

「あんたはどうなの？ 節子の娘なのに遠ざけられなかったのかい？」

そう訊かれたものだから、私はこれも自分で感じていたままに答えた。

「大学卒業までのお金は父に出してもらっているから、きっと私が感謝しているものと三人は思っている」

ってね。祖母は少し安心したような顔になって、しばらく黙ったままうなずいていた。そう、うなずいたのよ。遺影の中の祖母がね。

すると今度は背景の色がずっと青くなってね、

〈私は後悔しているよ〉

悲しそうな音声が聞こえてきた。

〈あの子たちをきちんと育てなかったことをね。ろくすっぽ社会勉強もしなかったのに会社に入れてやった恩を忘れ、私を締め出すような真似をして……〉

しばらく祖母は沈黙した。そのときには私はもう、デジタル遺影だなんてまったく思わず、祖母の次の言葉を待っていたわ。でも、あまりにしゃべらないから不安になって、私のほうから話しかけたの。「でも、経営のほうはうまくやっているわ。森代伯母さんも、泉伯母さんも、私の父も、やっぱりお祖母ちゃんの実業家の血を引いているもの」

〈いいや、ダメね〉

祖母の目は再び吊り上がった。そんなわけはないんだけど、空気が震えたように思えたわ。

〈あの子たちに任せてはおけない。いや、あの子たちが私の会社を動かしていると思うと、腹が立ってしょうがない。なつみ。私があの子たちを引きずり込むわ〉

……そう。「引きずり込む」って言ったのよ。

ちよっと、もう一本いい？ ダメって言っても聞かないわ。ここ

からが本当に怖いところ。ちょっと気分を落ち着かせなきゃ、先を話せないわ。

……………ふう。

続きを話すわね。デジタル遺影の祖母はこう言ったの。

〈森代は芸術が好きだわねえ。もちろん芸術は心を豊かにしてくれる。でもあの子の場合は違う。あれはただの所有欲よ。価値をわからないものを金に飽かして買いあさるなんてあさましいわね。それでも芸術愛好家ぶるなら、それにふさわしい形を与えましょう〉

ふさわしい形。どういうことかもうわかると思うけど、とりあえず、泉伯母さんのことも話すね。

〈あの子は勝ちもしないスポーツチームをたくさん作ったわね。自分はいいでしようけど、社員にどれだけの支持者がいるというの。ファンがいればそれでもいいけど、まったくふるわなかった。そんなあの子にもふさわしい形を与えるわ〉

そして最後は、谷朗。

〈谷朗は本当にダメな男。節子さんを悲しませるだけ悲しませて、何人愛人を作れば気が済むのかしら。女で痛い目を見せてあげるしかないわ〉

私は意味が解らずその場で立ち尽くしていた。祖母の両目はじつと私を捉えていた。

「三人がいなくなったあとは、あんたのお母さん、節子さんが会社を切り盛りするのよ。すべてをやり直さなくちゃならない。なつみはそれを支えるのよ。いいわね」

全然ピンとこない私に、祖母はさらにこうも言ったわ。

「もしまた、会社を私利私欲のために使おうという者が現れたら、そのときは、ひどい目に遭うことになる。なつみ、肝に銘じておきなさい」

何を言われてるんだろうってしばらく考えていたのね。

どれくらいぼんやりしていたんだろう。気づいたら、祖母の顔は初めに現れたときと同じ、微笑んだ顔だった。目じりと口角が時折ちよつと動くだけで、何もしゃべらない。音楽も普通に戻ってたなあ。

「お祖母ちゃん？」

話しかけてみたけど、もう何も音声は帰ってこなかった。

そう……まるで何もなかったかのようにだったわよ。夢なんじゃないかって、誰もが思うでしょ。でも私の中には鮮烈な記憶として刻み込まれたってわけ。

ああ、疲れた。もう少し、休憩ね。

*

ふう……やっぱりいいわあ。明日から隠れてやらなきゃいけないなんて、辛くてどうしようもない。健康嗜好品しこうひんだっていうのに、認められないのよねえ。真由もやったらいいのに。

そう？ ……うん、続きね、続き。

まあ、ここからは真由もちよつと知っている話なんだけど。

あれは私と真由が入社してほんの二か月くらいしか経たない頃だった。森代伯母さんが後援会会長を務める美術展が開かれた。伯母さんは一般公開の前日に美術館に行つて見学していたのよね。不意に、展示物の彫刻が倒れて、伯母さんは下敷きになって、救急車で運ばれたけど、それっきり。

警察が散々調べたけど彫刻が倒れた理由はいつさいわからなかった。だいたいフランスから借りてきた大事な展示品なんだから、倒れないように細心の注意を払っているはずよ。

それから一年後。……そうよ。泉伯母さん。

シラミネのアイスホッケーチームが二十連敗をしてしまったあの試合。慰めなぐさようと伯母さんはロッカールームに行ったのよね。静まり返つた中、誰かが別の選手に突然悪口を言った。それをきつかけとして、選手たちは大乱闘。罵倒ばとうされた選手が振りかぶつたステイ

ツクが、止めようとした伯母さんのこめかみを思い切り打った。

その結果……は、もう知っている話だから言わないわ。

そしてさらに一年後、まあ、口に出すのも汚らわしいけど、谷朗は性病で死んだ。六十も目前だつていうのに愛人に飽き足らずあちこちで遊んでいて、誰から感染されたのかまったくわからないって、秘書の倉田さんも頭を抱えていたわ。

とにかく、森代伯母さんは芸術品、泉伯母さんはスポーツの場、谷朗は女の禍わざわいでそれぞれ命を落とした。そして会社は一手に私の母、白峯節子の手には。

……あの日、香川の山奥のピースドームの中での出来事は、夢じやなかったんだって私、思った。そして、怖くなったの。今となつてはあのデジタル遺影に祖母の音声があらかじめ記録されていたのかどうかわからないわ。怖くて再訪もしていない。

そして同時に、絶対に人に言えないな、って思ったのよ。

私も敵が多いからね。あいつがこんな変なことを言っている、って噂を広められたら、すぐに引きずり降ろされちゃう。今になつて余計言えなくなっちゃった。

だって、事業には反対の人が多から。

本当にうちの会社って頭の固い奴が多くて嫌になる。これってか
つて嫌われたタバコとはわけがちがうのよ？ 吸えば吸うほど食欲

が抑えられてダイエット効果も抜群。もちろん気持ちも落ち着くし。煙だっかってのタバコとは比べ物にならないくらい、アロマみたいな香りじゃない。口から煙を吐くっただけで、化け物みたいな目で見られちゃうんだから嫌になる。

ふうー……。ごめん、熱くなっちゃった。私の入院中も真由に任せておけば安心なのよね。

話を戻すね。

ずっと黙っておこうと思ったこの話をどうして今日、真由に話そうと思ったかっていうと、語り継いでほしいからよ。

……。だから、「もしものとき」だって。

今後、祖母の意に反するような経営をする者が出てきたら、この話をしてほしい。社員が無駄な事業にお金をつぎ込んだりしないように。……。もちろん、デジタル遺影に霊が入ったなんて馬鹿げた言いはしないわい。創業者の思いは常に会社とともにあるんだっていう、寓話めいた感じぐうわで扱ってもらえれば。

そしてもう一つ、本当に私にもしものことがあったら、この私のデジタル遺影を会社のエントランスに貼ってね。

今回注文して分かったけれど、やっぱりデジタル遺影には受け答えの機能はないみたい。だけど、煙を出すことはできるんですって。

私の遺影から吐き出されるキルファッティ・シガールの香りを嗅いだ

ら、私が主張してきたタバコ事業の重要性をみんな思い出すわ。

……はい。これで話はおしまい。スッキリした気持ちで入院できるわ。

なによ、その顔。本当に大丈夫なんだから。

……えっ、真由も話があるの？ 何よ。話してよ。

いや、こんなときだから話してくれなきゃ。気になるじゃない。喉に小骨が引っかかったような状態で入院なんてできないって。

……うん。 ……うん。 ……えっ？

……

……はは。 嘘でしょ？

なんで今さら、そんなことを言い出すのよ？ 真由だつてずっと一緒にやってきたじゃない。三年は赤字でも、ここから必ず盛り返すことができるって……。

……私利私欲？ 私が？

は、はは……よくそんなことが言えたわね。

……私が、私利私欲のために、タバコ事業をしているって？

ブラジルシガーは従来のタバコと違って、匂いもいいし、食欲を抑えてダイエット効果が認められるのよ？ その価値を広く世に知らしめることによって、長らく肩身の狭い思いをしてきた喫煙者たちが、堂々とタバコを楽しめる社会を実現できるじゃない。だいた

い、従来のタバコだって悪いものじゃなかったって私は思うわ。気分をリラククスさせてくれるし、タバコを吸う人同士のコミュニケーションにも役に立つ。タバコの社会的地位を向上させるのが、どうして私利私欲なの？

「キルファッテイ」の名を使うのがどうなのかって？ たしかにこのタバコはキルファッテイ法とは何の関係もないわ。でも、世間的にはシラミネのダイエツトって言ったら、「キルファッテイ」って言葉が通りがいいんだもの。

……何を言ってるの。詐欺さぎなんて言うやつは放っておけばいいわ。え？ 私こそ祖母の功績を冒瀆ぼうとくする者だって？ 誰が言ってるんだよ、そんなこと。

それとも何よ真由。私の肺がんは、森代伯母さんたちが受けた仕打ちと同じだって、そういいたいの？ 祖母の呪いだって？ ……いや、そう言いたいって顔をしている。

ひどい。私がどんな思いで真由に祖母の話をしたかわかっている？ 真由、今のは聞かなかったことにしてあげるわ。私のいないあいだ、事業をきちんと……あっ、ちょっと待ちなさい！ 待ちなさいってば！

持っていきなさいよ、私の遺影を！

(終)